

「児童の世紀」を振り返る

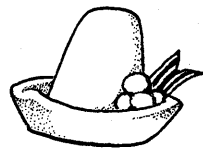
— その三 —

児童研究の根拠

幕開けした二〇世紀が、「児童の世紀」であり得たか否かは別として、「児童研究の世紀」であったことだけは疑うべくもない。先に言及したフロイトによる「幼児体験の発見」に加えて、新しく児童心理学に科

本田 和子

学的方法が導入されたことで、幼い子どもが客観学の対象たり得ることが発見されたのであった。結果として、子どもについて語ることは、幼年期を遙かな過去として懐かしく回想したり、あるいは、親となった喜びに駆られてわが子の成長を記述するという私的領域から脱して、曲がりなりにも客観性に依拠した学問的



言説で装われるようになる。

わが国もまた、その動きを共有しつつ今世紀の歩みを開始した。一八九八（明治三二）年、雑誌『児童研究』の発刊はそれを象徴する。第一巻第一号の冒頭に掲げられた「発刊の辞」は、その基本精神を次の言葉で明確化していた。

一九世紀の後半に於て世界の事物は著く進歩し學術に工藝に皆駸々として觀を改めたり而して學術に於て其進歩の顯著なるもの醫學の如き理化學の如き固より一にして足らずと雖も心理學の如きは又其顯著なる進歩の行程中にあるものといふべし

（中略）

就中兒童心理學の如きは其發達最も速にして獨に佛に英に米に或は醫學上より或は生物學上より或は生理學上より或は解剖學上より熱心に之を研究し終に單に心理學の名に満足せずして兒童學の新

名稱を附與し兒童の心身全體に關する研究を創むるに至れり蓋し一對象物に就き斯の如く各科の學者が熱心に研究したるものは古來其類多からざるべし抑是等の學者は何の必要ありてかゝる熱心を兒童の研究に傾注するか即各自が専門とするとこの學に新光明を與ふべき秘密は藏れて可憐なる此新來の賓客の中に在ればなり而して特に教育の如きは直接に兒童に關係せるものなれば其研究の必要一層切を加ふるものあり是歐米の學者及我國の識者が夙に其研究を企圖したる所以なりとす

（以下略）

ここで使用されている「兒童學」という新名稱が、どの程度、子どもに關する総合學としての自覺に支えられていたのかは定かではない。また、海の彼方に勃興しつつあった「子どもを子どもとして総合的に把握しよう」とする動き、たとえば WHOL CHILD とい

う概念の強調や、あるいは「パイロロジー」という領域を確立しようとする運動と、どの程度コミットしているのかも不明である。当時の啓蒙的女性誌『女学雑誌』などには、おりに触れて、子ども研究の新動向が紹介されていたから、恐らくそれらと無縁とは言い難いが、ただし、それらに影響されたとする根拠もない。

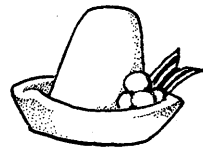
しかし、児童研究の進歩を企図したこの雑誌の創刊は、大洋を隔てた両地域で、子ども研究に注がれる類似のまなざしが発生したことを物語るものとして興味深い。前文で語られているように、医学・生物学・心理学、そして心理学等の諸分野に、研究対象として、より正確には「研究材料」として、「子ども」が大きく浮かび上がってきていたことは疑うべくもないのである。

子ども研究の興隆に関して、恐らくは編集主幹の高島平三郎であろうが、「発刊の辞」の筆者は、次のよ

うに説明していた。すなわち、児童という可憐な対象のなかに、それぞれ別の学問分野に「新光明を与ふべき秘密」が内蔵されているからと云うのである。ところで、この一文があらわにするのは、次のような学問分野の新事情に他なる

まい。つまり、人間を対象とした既成諸学のなかの少なからぬ分野が、分野の拡充と充実を期待して「子ども」という新素材の上に熱いまなざしを注ぎ始めたということであろう。しかも、その期待は、進化論に触発されて、始原の解明による事象の明確化を志向するものであった。

同誌上の論説欄には、それを裏付ける「児童研究の必要」と題された一文が掲載されている。この一文において、筆者は、おおよそ事物の研究は詩的段階から始まって科学的研究に移行するとし、児童研究も例外



ではないと位置づけてルソーの『エミール』を例にとる。すなわち、ルソーの提言は世人の児童観を革新するほどの力あるものには相違なかったが、ただし、彼は心理学者でも生理学者でもなく、そのゆえに詩的眼孔で子どもを見たのであって、現今の学者たちのように科学的眼孔で子どもを観察してはいない。しかし、今世紀（一九世紀）後半の科学の進歩は、従来は詩的観察の域に止まっていたものをも科学的観察の対象へと移し替えてしまった。そして、児童研究もまた、その一連として、新しい科学のまなざしに晒されることになったのである。しかも、児童の科学的研究は、「児童研究」ならではの独自の意義と必要性に彩られている。

而して児童研究の如きは如何なる種類の必要によりて起こりたるものなるか。今これらの問題に就て考察するは、頗る有益なることなりとす。吾人

は便宜の爲めに、茲にその理論的方面に關する必要と、實際的方面に關する必要とに分ちて、之を論ぜんと欲す。

今理論の方面よりして之を云へば、児童研究の必要は、児童が原始的のものになるあり。自然科学にありては、動物學及び植物學の如きは、古生物學の研究によりて大にその眞趣を解釋し得たるもの少なからざると同じく、既に發達せる人間の心理を研究せんとするものは、原始的の狀態に溯りて、児童の心理を明らかにせば、之が爲めに、大いに得る所あること勿論なり、又人類學者にとりては、児童は自然の位置に於て成人と動物との中間に位するものなるを以て、人類と他の動物との比較的研究をなし、或は文明時代の児童と野蠻人とは、如何なる點に於て類似せるかを發見するを得べし。

（以下 略）

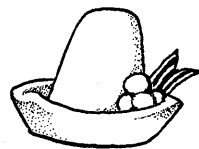
動物や植物に関する生物学的見解は、進化論的知見によって大幅な革新を遂げ、その原初形態と進化過程の解明は、それらの生態をよりよく理解させるものとして機能している。それに倣うならば、人の始原形態たる子どもを観察・研究することにより、人間に対するより本質的な理解が可能となるに相違ない。人間を対象とする科学的研究は、ダーウィンらの指先が指し示した方向に学んで、人の始原を「児童」に求め、その解明への取り組みを意図したということになる。

しかも、ことは、科学的人間理解の域に止まらなかつた。先の文章は、哲学、倫理学などの人文諸学を例に取りつつ、児童研究はそれらの分野をも深化させると断じる。たとえば、子どもの研究は、人間の生得的な能力と経験に基づくものとの区別を可能にするし、先天観念の有無に関してもある種の根拠を提供することが出来る。もし、児童が人生の最初に心に起こるものを語ってくれるならば、カントの唯心論さえも

が理解可能になる筈であり、また、人間とは、本来的に良心的存在なのか否か、或いは、自愛的な存在か他愛的存在かを決定するのでも、児童研究の成果に負うところが大であろう。と、こういう次第で、児童研究は諸学の発展と深化のために不可欠となったと言うのである。

その後が続く実際の必要性では、幼児・児童の教育における対象研究の重要性が説かれているのだが、この文章が物語るのは、日々隆盛の度を加える教育事業に関して、科学的根拠を求める意志であろう。何が「最も必要なもの」であり、どのような営みが「確実な指導」と言い得るかを判断するのが「児童研究」であるとの強調は、その端的な証しと言い得よう。

進化論によって新しく意義付けられた「子ども」は、進化論的始原探求のまなざしに囲繞されて諸分野



における学問研究の対象と化し、その「教育」は、科学中心主義の申し子として根拠に科学的必然性を求めた。エレン・ケイが待望した科学の時代は、紛れもなく訪れた。しかも、科学はすべてを説明し得るとする素朴な楽天性に支えられて、今世紀の子どもらを覆ったのである。

パラドックスとしての「童心主義」

——遅れてきた湖畔詩人たち——

稚兒を見よ。其目の清しきはみ空の星の如く、其頬のふくよかに麗はしきは、なべての花にも木の實にも劣らず。物見るに怖れといふものを知らず、泣くにも笑むにもわが心のまゝにて、欲しと思ふ物あれば手をさしのぶるに誰憚ることなし。神の如き無邪気とは之なるべし。とりわけて心ひかるゝは、母の乳房にすがれる時也。眞白き胸に顔をおしつけて、ひたすらに勢ひよく吸ふさま

は、さながら一切の生命の吸ひ盡くさむとするものゝ如し。赤子とはよくも謂ひけるものかな。かく許り赤裸々に、かく許り公明に、かく許り清くして又かく許り弛みなきいのちに充ち満ちたるもの、げにまたと此世にあるべきやうもなし。昔賢女コルネリオ、一婦人のために其所持の寶玉を見んことを望まざるや、己が愛兒を指して、彼等こそ妻が第一の寶玉なれと答へき。まことに然り。たゞ可愛しといふのみにては、恐らくは其意足らじ、神の如く無邪気なる小兒ほど、何者にもまして貴きものはなからむ。

(以下 略)

ここに謳われた子ども賛美の過剰さと、その臆面もないまでの陶醉ぶりは、現在の私どもの現実感覚の前に、いささかならぬ戸惑いと若干の気恥ずかしさとして受け止められるのではないか。日常をとにもする仲間

として見るとき、子どもとは、常に怖れを知らぬ存在でもなければ、また、必ずしも神の如く無邪気とばかりは言い難い存在であると知っているからである。しかし、この時代の空気は、こうした誉め歌に寛容であつた。というより、ともに声を揃えて誉め歌を歌おうと意図した節さえ感しられる。なぜなら、こうした子ども賛歌は、一人啄木の筆だけではなく、他の多くのもの書く人々の筆からあふれ出しているからである。

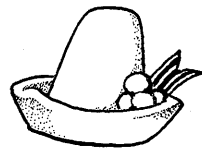
例えば、一九〇四（明治三七）年には教育ジャーナリストの下中弥三郎が、啄木に先立って、彼にも勝る子ども賛歌を『婦女新聞』紙上に奏でていたのだつた。

子供、子供、子供、世の中に子供ほど美なるものはなく、子供ほど真なるものはなく、而して又子供ほど善なるものではありません。婦人が人間界の

花でありますならば、子供は人間界の實であります。否、子供はこの地上に於ける神であります。子供は大人の如く偽をつきません。子供は大人の如く恐れを持ちません。子供は勇ましく活發であります。子供は實に強いものであります。

（以下略）

今世紀の初頭、わが国の一部知識人たちの目には、「子ども」こそが人間の当為であり、あらゆる価値の実現体として映じたということらしい。私もは、ここに、子どもの「無垢」に人間の理想を見た、一八世紀後期イングランドの湖畔詩人たちの残響を聞くことが出来る。そう言えば、先の啄木の文中には、「小児は成人の父である」と言うワーズワースの言葉が引か



れてその先見性が讃えられると同時に、一方では、子どもを父と仰ぐことを忘れ、ひたすらに成人化を急がせる現代が嘆じられ憂えられていた。彼らは、一世紀遅れでやってきた「わが国の湖畔詩人たち」とでもいうのだろうか。

先に触れた『児童研究』誌は、六年後には編集責任を従来の「教育研究所」から「日本児童研究会」へと移して、研究誌としてますますの充実を期する旨が宣言されている。会長には帝国大学教授で科学的心理学の導入者として知られる元良勇次郎が就任し、会則も制定されて、研究会としての組織が整えられていた。

今世紀の一つの特色たる「教育に奉仕する科学的児童研究」が、いまだ拙く頼りない足取りとは言え、とにかくにもその歩みを開始し、順調に歩幅を広げつつあったのである。

そんななかで、わが国の湖畔詩人たちは「子どもは大人の父であり、大人になる必要などはないのだ」と

ばかりに、臆面もない子ども賛美を繰り返す。教育の根拠として子ども研究が推進されるとき、仮に動機が「子ども尊重」という社会的善意であったにせよ、その実、効率的な成人化という意味の「子ども殺し」が遂行されることに、当代の詩人たちは敏感であったとしても言うのだろうか。このことは、稿を改めて考えるに値する興味深い問題と言えよう。

(聖学院大学)